

阿賀川直轄改修100周年記念事業  
ゆかりの地を訪ねるコース2

阿賀川直轄改修と  
日橋川を訪ねる



泡の巻橋  
喜多方市慶徳町・会津坂下町

- 阿賀川河川事務所
- ▼
- 戸ノ口十六橋水門
- ▼
- 猪苗代第二発電所
- ▼
- 猪苗代第四発電所・切立橋
- ▼
- 阿賀らん処・川番所・日橋川改修工事資料
- ▼
- 昼食
- ▼
- 泡の巻橋・山崎新湖跡  
捷水路群(直轄改修はじまりの地)
- ▼
- 道の駅あいづ湯川会津坂下・宮川旧路
- ▼
- 神指城跡・南四合排水ポンプ車格納庫
- ▼
- 阿賀川河川事務所

主催 阿賀川直轄改修100周年記念事業実行委員会  
協力 特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク  
阿賀川・川の達人の会  
(一社)北陸地域づくり協会



阿賀川直轄改修100周年記念事業実行委員会

(事務局)  
〒965-8567 福島県会津若松市表町2-70  
国土交通省北陸地方整備局 阿賀川河川事務所内  
TEL 0242-26-6411 FAX 0242-29-2776

(編集)  
特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク  
TEL 0242-27-2921

令和3年10月24日発行

阿賀川・日橋川・湯川河川改修洪水年表

天文5年(1536)6月、「白髭の水」発生  
慶長16年(1611)8月、会津大地震で山崎新湖出現  
元和9年(1623)八田野まで八田野堰完成  
寛永13年(1636)阿賀川が氾濫し神指城二ノ丸土塁と掘跡が欠損する  
天保9年(1836)戸ノ口堰が若松城下まで完成  
明治13年(1880)戸ノ口十六橋水門完成  
明治15年(1882)安積疏水開削工事完了  
明治21年(1888)7月、磐梯山爆発、裏磐梯湖沼群が出現する  
大正2年(1913)8月、阿賀川堤防決壊、死者・行方不明13名  
大正3年(1914)猪苗代第一発電所運転開始  
大正7年(1918)猪苗代第二発電所運転開始  
大正10年(1921)2月、内務省阿賀川改修事務所創設  
大正10年(1921)から昭和13年(1938)阿賀川狭窄部で3本の水路開削(捷水路)工事が実施される  
大正10年(1921)猪苗代第四発電所建設に伴い切立橋が鹿児島本線から運ばれ架けられる  
昭和16年(1941)7月、阿賀川、日橋川氾濫  
昭和22年(1947)9月、阿賀川、湯川氾濫  
昭和31年(1956)宮川放水路完成  
昭和33年(1958)9月、会津地方で大水害発生  
昭和33年(1958)湯川放水路完成  
昭和46年(1971)大川ダム実施計画調査着手  
昭和52年(1977)4月、大川ダム本体工事着手  
昭和56年(1981)日橋川堤防改修完成  
昭和57年(1982)9月、会津地方洪水発生  
昭和62年(1987)10月、大川ダム完成  
平成14年(2002)7月、床上22戸、床下83戸の水害  
平成23年(2011)7月、会津地方西部で豪雨  
平成27年(2011)9月、会津地方南部で豪雨  
令和元年(2019)10月、会津地方で豪雨、過去2番目の降水量となる  
令和3年(2021)12月、阿賀川直轄改修100周年記念式典が開催される



# 阿賀川とは

阿賀川は、福島県南会津郡南会津町の栃木県境の「荒海川」が源流で、会津地方の猪苗代湖や只見川を含め、すべてが流域となる流域面積が全国8位の大河です。福島県部分が「阿賀川」、新潟県入ると「野」が追加され「阿賀野川」と名称が変化します。

江戸時代前半に会津藩で編纂を命じた『会津鑑』によると、只見より尾瀬までを「揚川」、只見から会津坂下町の片門までを「只見川」その下は「揚川」といったとあります。会津藩が編纂した『新編会津風土記』には、日橋川と只見川が合流すると「揚ノ川」と呼んでいたと書かれています。現在の阿賀川源流の南会津町では「荒海川」「大川」「鶴沼川」と呼び、会津盆地に入ると「大川」と呼んで地域によっては「蟹川」「佐野川」とも呼んでいたと書かれています。

会津盆地内では、平坦地を流れますが、盆地の出口から新潟県境までは山間部で、西会津町の銚子ノ口から新潟県阿賀町津川までは、渓流部で岩が出た急流となります。新潟平野に入り、新潟市で日本海にでます。明治時代まで、会津への主要物流ルートとして、揚川(阿賀野川)舟運が利用され、新潟県の津川と喜多方市の塩川、会津若松の材木町に荷下ろしの拠点がありました。

# 日橋川とは

猪苗代湖は、戸ノ口から会津盆地へ自然に流れるのが日橋川です。また、郡山へ用水のトンネルが掘られ明治13年(1880)には、戸ノ口に水門ゲートが造られました。日橋川とは、『新編会津風土記』に磐梯町大寺付近の呼名で、昔「新橋(にいばし)川」と呼んでいたのが、下流の落合に新橋(しんばし)が架けたので、字が同じで混乱したことから、「日橋川」の字に替えたと書かれています。



阿賀町津川、明治末頃

# 阿賀川洪水の歴史

古くから阿賀川は洪水との戦いでした。古くは、阿賀川は会津盆地に入ると会津美里町の本郷から西に会津若松市北会津町との境界を流れ、新鶴から会津坂下町方面に流れた「鶴沼川」(鶴の首のように曲がっていたこと由来)が本流でした。現在のように、会津美里町本郷から北に流れるようになるのは、天文5年(1536)の「白髭の水」洪水が発生したからです。現在のように会津美里町本郷から北の湯川村へ流れを変えてからは、元の流れには戻りませんでした。

その後「河川改修洪水年表」にあるように、度々水害に見舞われています。

大正2年(1913)8月27日、台風によって会津地方の堤防288箇所が決壊し、死者・行方不明13名、1006戸が浸水しています。

昭和16年(1941)7月22日には、阿賀川上流部が大雨となり日橋川や阿賀川が氾濫します。

昭和22年(1947)9月15日のカスリン台風によって、阿賀川と湯川が氾濫します。

昭和31年(1956)7月17日の梅雨前線による2日間の雨量が140mmとなる大雨で、阿賀川、湯川、宮川が大氾濫します。

昭和33年(1958)9月18日の台風21号では、堤防381箇所が決壊し、死者6名、2,433が浸水しています。さらに、9月27日には台風22号によって496戸が床上浸水、1869戸が床下浸水しています。

昭和53年(1978)6月27日、梅雨前線によって56戸が床上浸水、428戸が床下浸水となります。

昭和57年(1982)9月13日の台風18号では、22戸が床上浸水、248戸が床下浸水となります。

令和元年(2019)10月12日の令和元年東日本台風では、南会津方面に豪雨となりましたが、大川ダムの水位を常時満水位より21m下げた事前放流によって、下流部への浸水被害が起きないように調整したため、阿賀川流域では被害が発生しませんでした。この時、宮川流域では、災害が発生し県道の橋が崩落しています。



袋原・旧河道、喜多方市・会津坂下町

# 慶長会津大地震と山崎新湖

慶長16年(1611)8月21日の朝8時頃に発生した慶長会津大地震は、推定で震源が柳津町西山から三島町滝谷周辺、震度6強、マグニチュード6.9から7.2、会津の死者が約3700人とされる直下型地震でした。『会津旧事雑考』には、「会津川(阿賀川)の下流で山崩れ、榎(喜多方市慶徳町真木)を塞ぐ、それゆえ四郡(会津・耶麻・河沼・大沼)が水漬し」そして「疎通に当たらせたが三日流れず、再び崩れ水が相湛え、山崎新湖と呼ぶようになる。寛永の末(1645年)まで続いた」という。その大きさは「東西三十五町(3.8km)、南北二十町(2km)の大きさ、13村浸水」したという。その大きさは約15平方km、裏磐梯の桧原湖(10.8平方km)より大きかった。会津盆地西縁断層帯が動き、真木付近が土砂崩れとなり下流部が競り上がったためです。

この時、若松城天守閣は傾き使用不能となり、柳津の虚空蔵堂、新宮熊野神社長床、塔寺立木観音堂など約二万戸が倒壊しました。山崎新湖の水を抜くには約50年を要しています。

# 柳津虚空蔵堂とあかべこ

慶長会津大地震によって倒壊した柳津の虚空蔵堂。その直前の5月『会津旧事雑考』に「蒲生秀行が遊戯し、毒(柿渋・山椒の皮など)を揚川(只見川)の上流(出倉)より流し、下流の里まで魚が腹を上へ浮き上がった」『塔寺八幡宮長帳』には「神仏をおろそかにした祟りより大地震があった」と伝えられています。

虚空蔵堂は、慶長会津大地震の6年後、元和3年(1617)に秀行夫人の振姫(家康の娘)によって再建され、協力したのが赤牛の「あかべこ」でした。黒の斑点は天然痘除けを祈願した印で、ウイルス除けにご利益があります。



断層の痕跡、喜多方市慶徳町県道16号線工事中に見られたもの



## 戸ノ口十六橋

猪苗代湖から自然に流れ出る戸ノ口地点は、江戸時代から二本松裏街道として、若松から猪苗代までの最短ルートとして利用され、橋脚部分を水流で流されないよう石で積んだ十六橋がありました。明治13年(1880)に完成した安積疏水の水門は、猪苗代湖の水位調節に利用されています。

戊辰戦争の慶応四年(1868)8月22日、母成峠で敗戦した会津藩と新選組らは、西軍の進行に対し夕方4時には十六橋を壊そうとしますが、薩摩藩の川村隊が進行し会津藩を銃撃し渡河します。そして、西軍約二千名が、現在の県立会津レクリエーション公園内に土佐藩、戸ノ口北側に薩摩藩が陣取ります。会津藩は、22日に滝沢本陣で松平容保公より出撃命令を受けた白虎隊士中二番隊37名と新選組、水戸藩、農民を急きよ集めた約600名が強清水東の戸ノ口原に出撃しました。会津藩では、街道を挟んで北と南に分かれて挟み撃ちにする作戦をとりますが、翌日23日早朝から始まった戦いでは、会津藩の鉄砲は白虎隊の射程300mに対し、西軍は七連発銃を含むもので射程が800から1200mあり、武器は大きく異なり白虎隊が奮戦するも突破されます。その陣地跡が8か所残されています。

十六橋には、会津藩によって戸ノ口堰の取り入れ口が造られ(現在は発電所の用水を利用)、寛永18年(1641)河東町八田まで完成、天保8年(1837)には若松城下まで引かれて町北・高野町や湯川村の水田1865haを潤しています。

安積疏水は、明治12年(1879)に始まった日本初の国直轄農業水利事業で、オランダ人技術者ファン・ドールンが政府の命で実地調査を行い、疏水の開削が実行されました。工期約3年、延べ85万人を動員、40万7千円(現在の約400~500億円)延長52kmの水路が明治15年(1892)8月に完成。約3,000haの水田が誕生し、郡山発展に貢献しています。平成28年(2016)4月日本遺産に認定。



戸ノ口、十六橋

## 猪苗代第二発電所と東京駅

裏磐梯と猪苗代湖、猪苗代湖と会津盆地の落差はそれぞれ約300m、その落差を利用して、発電所が建設されています。明治32年(1899)に安積疏水を利用し沼上発電所が運転開始されると、大正3年(1914)に猪苗代第一発電所、大正7年(1918)に猪苗代第二発電所が運転を開始します。その電力は、大正3年(1914)に完成した日本初の長距離幹線鉄塔により東京へ送られ、東京の発展に大きく貢献しました。

猪苗代第一発電所と第二発電所の建屋は、国重要文化財となっている東京駅を設計した辰野金吾が手掛けたもので、東京駅と同じ煉瓦が使用され、窓ガラスも手作りで建設当時の面影を多く残しているのが第二発電所です。現在でも外観と内部が建設当時のままに残され、水車・発電機は、当初6台でしたが、現在は3台で、発電量は63,400kWを誇り、今でも首都圏の生活に役立っています。

## 磐越西線と渋沢栄一

磐越西線の前進は岩越鉄道。渋沢栄一が関わっています。福島県知事の下義雄(白虎隊石田和助の兄で長崎県知事を歴任)は、明治27年(1894)渋沢を訪問し、施設(私鉄)鉄道による早期敷設を相談し、発起人になって財界の協力を要請します。明治29年(1896)に岩越鉄道株式会社が設立され、本社は東京に置かれ、支社が若松に置かれます。明治32年(1899)7月15日、郡山から若松間が開通します。若松から新潟間のルートが一時、会津坂下ルートに決定されますが、喜多方の猛反対により現在のルートに戻ります。明治34年(2001)4月には新潟の津川から若松に入った渋沢は、東山温泉に宿泊、翌日10時に若松駅演説をして大歓迎を受けます。明治37年(1904)に喜多方まで、大正3年(1914)に全線開通します。大正6年(1917)には松野トンネル(今は無し)・慶徳トンネル部分が崩落事故で新ルートに作り替えられています。この時、大量の煉瓦が使用されています。



猪苗代第二発電所

## 猪苗代第四発電所と切立橋

猪苗代第四発電所は、大正15年(1926)に稼働し発電量は37,100kWあります。大正10年(1921)猪苗代水力電気株式会社(現在の東京電力株式会社)は猪苗代第四発電所を建設するため、大正14年(1925)には、磐越西線広田駅から建設資材運搬用の軌道が建設されます。その時、日橋川を渡るために架けられたのが、切立橋です。

この橋は、もともと明治24年(1891)九州鉄道の鹿児島本線矢部川に架けられたドイツ製の橋で、耐荷重量不足のため取り外されていたものを当時九州鉄道の社長と猪苗代水力発電株式会社の社長が同じ仙石貢だったため、発電所建設に利用しようと大正14年に架けられたものです。明治23年(1891)に製造されたドイツのハーコート社製で、ボルトで部材を固定し組み立てするプレハブ式の橋として、日本に11橋輸入され、現存するのは2橋、長さ49m乗用車も通れます。

切立橋を渡った南側の堂島には、熊野三社の一つ那智社がありました。その堂跡は、6間四方の礎石跡があり、熊野神社の祠が祭られています。熊野神社は、天喜3年(1055)前九年の役の時、源頼義が戦勝祈願のために熊野堂村(会津若松市河東町熊野堂)に熊野神社を勧請し本宮社と新宮社は熊野堂村に那智社が堂島に建てられました。寛治3年(1089)後三年の役の時、源義家が本宮社を岩沢村(喜多方市上三宮町岩沢)、新宮社を新宮村(喜多方市慶徳町新宮)、那智社を宇津野村(喜多方市熱塩加納町宇津野)移されています。また、切立橋を渡り進んだ林内には、石積みされた古屋敷古墳と天正17年(1598)6月5日に伊達政宗と会津の葦名義広が戦い、敗れた会津武士の塚跡が点在しています。

この橋の付近は、『新編会津風土記』によると「堂島川」と呼ばれていました。



日橋第四発電所、切立橋

# 阿賀らん処・川番所

会津盆地の中央に位置する喜多方市塩川町は、日橋川との合流地点にあり、度々洪水に見舞われ、特に昭和16年(1941)7月23日の洪水では、家屋流出9棟、973棟の家屋が浸水、塩川町中が大被害となっています。昭和18年(1943)には工事の許可が出されませんが戦争で中断し、昭和31年(1956)に再開され、大塩川と日橋川の合流の古町は撤去され、川幅が広くなり、昭和56年(1981)に全区間(直轄6.6 km)が完成します。

喜多方市塩川町中心部の身神川地域は、昔から低平地で、大雨のときなどは日橋川の水位が上昇すると、自然に排水されない雨水が居住地にあふれ出し、多くの被害をもたらしました。この内水被害の防止と軽減を目的で建設されたのが、身神川排水機場です。1階に商工会の案内所、2階に資料展示場があります。

# 宮川放水路・湯川放水路

湯川は、会津若松市街地から喜多方市の日橋川との合流点間が洪水常襲地帯であったため、洪水を防止するため新水路が計画されました。御旗町から延長約2.5kmの水路で、昭和33年(1958)に通水し以後水害が無くなりました。

湯川放水路は会津若松市街地を流れる貴重な水辺のオープンスペースです。都市化の進展に伴い水質汚濁が進み、良好な水質の確保や生物生息環境の回復のために、地域と一体となって、水環境整備事業を実施しています。

宮川は中・下流部が、河積不足のため洪水常襲地帯でした。そこで、新水路が計画され、延長約2.8kmの水路が昭和31年(1956)に通水しました。

泡の巻橋公園にある会津若松に「稽古堂」を作った如黙の墓



# 阿賀川洪水と雨屋工場

阿賀川は洪水との戦いでした。天文5年(1536)の「白髭の水」洪水は、過去最大級の洪水だったので、会津美里町本郷から北の会津若松市を通り、湯川村へ流れを変えた会津最大の洪水です。その流路が変化する手前の大戸町雨屋付近も洪水の常襲地帯でした。

「河川改修洪水年表」にあるように、度々洪水に見舞われています。大正2年(1913)8月27日、台風によって会津地方の堤防288箇所が決壊し、死者・行方不明13名、1006戸が浸水しています。その頃の阿賀川は、会津若松市大戸町と会津美里町との間を流れていました。その後、大正時代の阿賀川の流路は右岸の東側を流れ、大戸町雨屋寄りの国道沿いや集落近くを流れていました。それが会津美里町大石寄りに変化しました。それは、会津若松市大戸町上三寄の馬越頭首工直下部分を、大戸町の住民が、頭首工下流の河川内にあった大岩をダイナマイトで爆破、そのため流路が変化し、現在のように西側の大石寄りに変化したのです。その後、大戸町と会津美里町(旧本郷町)との境界争いが絶えませんでした。

大正7年(1918)には、福島県によって阿賀川の改修計画が作成され、翌年には内務省によって喜多方市慶徳町山科地点の改修が始まります。大正10年(1921)には、内務省で喜多方市慶徳町真木の泡の巻橋付近と会津坂下町袋原の捷水路の直轄工事が始まります。また、会津若松市大戸町下雨屋の字村北に雨屋工場が建てられ、上雨屋字余松地内に見張小屋が建てられ除石工事(低水路整備)が始まります。会津坂下町袋原は、丘陵部を大きく蛇行し、内部が袋状になっていたもので、約6kmが0.5kmの河道工事は、昭和13年(1938)に完成し、現在の流れのようになります。旧河川は今でも残され、川前のヘラブナの釣場としても知られています。

1770年代に描かれた『神指原古城之図』青が水、黒が土塁を表しています



# 神指城跡

会津若松市神指町本丸にある、関ヶ原の戦のあった1600年に築かれ未完成となった大規模な平城です。地形図から計測すると大きさは、二ノ丸の堀跡を含めると南北約750m、東西約710mあります。面積は堀跡を含めると約55ha、若松城跡の約2倍の面積で、周りは水田、西に阿賀川があります。

大口は東側に位置し、北東の鬼門には樹齢約600年の「高瀬の大木(ケヤキ)」(国指定天然記念物)があり、その木を基点に『会津旧事雑考』に上杉景勝家臣、執政の直江兼続が北極星を基準に夜測量し町割までしました。城の北、現在の大江戸温泉の地には、上杉謙信の遺骸を納めた御堂(みどう)が建てられたが未完成に終わっています。『塔寺八幡宮長帳』に「神指地区(会津若松市神指町)の十三村を強制撤去、領内から八万~十二万人を動員し、家臣の割普請によって工事をした」と書かれています。慶長5年(1600)3月18日から工事を開始しましたが、6月10日徳川家康の上杉討伐命令に備え工事を中止し、動員された人を田島、白河方面など国境の防御にあたらせました。本丸部分は門まで完成したとされますが、上杉氏の米沢移封前に破城されます。石垣は本丸部分に積まれていることが確認できますが、二ノ丸までは積まれていません。『神指原古城之図』(個人蔵)は、江戸中期に描かれた図で、黒で表した土塁に折れの横矢掛りが描かれています。本丸部分の土塁の折れは、今でも確認できます。築城途中で中断された大規模な城としては全国的に珍しく、築城途中に作られたスロープも残されています。

寛永13年(1636)大川の洪水によって、二ノ丸南西の土塁と堀が洪水によって欠損しました。その時、如来堂村は西側から現在地に移転。阿弥陀如来堂が建てられていたことから如来堂村といい、新選組奮戦地としても知られています。

